

# 終刊の辞

高久多美男

創刊の志と、その後

来年一月発行の第四〇号をもって本誌の発行を終了することとしました。まずはご愛読いただいている皆様、サポートしていただいている皆様に心よりお礼申し上げます。

本誌が生まれることになったきっかけは、二〇〇八年十一月のこと。当時、横浜市長だった中田宏氏と話しているうち、どちらからともなく、「われわれ日本人は、自分が生まれた国のことを知らない」という話題になりました。

「であるなら、そのことを批判するのではなく、自分たちも勉強しながら、この国のいいところを紹介するような媒体を作ろうじゃないか」

話はそう発展したのです。その媒体は、利益を第一に求めるのではなく、「この国のいいところを紹介する」という志に徹しよう。自分たちはもちろん、登場していただく方も無報酬。私個人が出資して会社をつくり、編集の指揮を執る。中田氏は人選その他でコーディネートし、自費で参加するなど、大筋が決まるまでわずか数分の出来事でした。採算など、マネジメントに関する話はいつさいなし。まるで熱に浮かされた若者が勢いに乗って同人誌を作り始めるかのような無計画な構想でした。

その日のうちに「Japanist」というタイトルが浮かんできました。当時、私が経営する会社は『fooga』という月刊誌を発行しており、八年が過ぎていました。そういう状況下での新しい雑誌の創刊は、けっして楽ではありませんでしたが、精神衛生上はそれが幸いしたと言えま

す。いまだにリーマンショック後の経済の混乱を生々しく語る人が少なくありませんが、〇八年十一月と言えば、リーマンショックの直後。しかし、私はその影響を感じる暇がないほど編集に没頭したのです。あとから振り返っても、リーマンショックによってどのような影響を受けたのか、まったく思い出せないほどです。

そして、本誌は〇九年四月、産声をあげることとなりました。当初は関東、中部、関西の書店で販売しましたが、ロスが大きいことから直接購読に切り替え、同時に広告募集をやめました。

裏表紙に掲げている「一点の曇りもない、志高き雑誌が、ひとつくらいあってもいいじゃないか。」は、私が書いたものです。リアリストを自認する人間としてははなはだ気恥ずかしいのですが、自分を戒めるため、あえて掲げました。長く続けるうち、さまざまな「誘惑」があるだろう。場合によっては当初の志と反することを選択してしまうかもしれない。そうなることを未然に防ぐため、この言葉を晒すことにしたのです。

幸いにも創刊の志からはずれることなく、十年間の発行を全うすることができそうです。この活動によって大きな成果をあげることができませんでしたが、小さな一石を投じたという自負はあります。

本誌を編集するうち、私たちは多くを学ぶことができました。なにより、日本には世界に類例がないほど深く多様な文化があること、社会のあちこちに「一隅を照らす」人々がいること。と同時に、本来は私たちで解決しなければならぬ多くの課題をさしたる危機感のないままに先送りしているという事実を知りました。

しかし、なによりの成果は、多士済済に取材し、知遇を得たことでしょう。それは、まぎれもなく無形財産と言えるものです。今後、その財産をどう活かすかは、私たち次第です。残り三回、全力を尽くします。これまで支えていただいた方々に改めて感謝するとともに、本誌の発行によって培ったものを次の機会に活かすことを約束いたします。

